

謝 辭

謝 辞

筑波大学大学院博士課程教育学研究科に、平成元年4月に入学以来、私は、「コミュニケーション」というキーワードをもとに研究を続けてきました。コミュニケーションという問題が数学教育の中で明確に認識されていない時から今日まで、私がこのテーマを追究し続けることができましたのは、恩師である筑波大学名誉教授能田伸彦先生のときに厳しく、そして、心温かなご指導があったからだと思います。埼玉県の高校教師であった私に、筑波大学大学院への進学を勧めていただいたのも能田先生でした。見通しの立つ正当な研究テーマを選択せず、「数学学習におけるコミュニケーション」という危ういテーマについて、一緒に面白いと感じながら、研究者としてなんとか論文が書けるようになるまで育てていただいたご恩に対して、心から感謝の意を申し上げます。1988年の夏、ハンガリーの首都ブタペストで開催されたICME 6での先生との出会いは、私の人生の転換点でした。能田先生が追い求めてきました「子どもの心を開く」という教育思想を、先生の弟子の一人として、私もコミュニケーションというテーマの中で、今後も追究し続けたいと思います。論文を書き終えて、いつの間にか個人の認知過程を他者に対して開くという考察にたどり着いたことに驚きを感じながら、能田先生から受けました禅問答のようなご指導に悩みながら歩いてきた道筋に、一筋の光明が差し込んできた思いを感じています。

人間総合科学研究科学校教育学専攻長として、また、本論文審査の主査としてご尽力していただきました筑波大学教授大高泉先生には、本論文の草稿に対して細部にわたりご丁寧なご指導を賜りました。論文審査の過程で、大高先生の研究にかける情熱と冷静かつ厳しい研究態度の一端にふれさせていただきまことは、私にとって、研究者としていかに生きていくべきかという示唆を得る機会として、大変貴重な体験になりました。先生が身をもって示してくださいました、教育学研究者が教育者としても優れた資質を持っているということ、これからの人生の糧として、精進していきたいと思えます。大高先生の穏やかな話し方に大変助けられました。先生のご支援とご指導に心より感謝の意を申し上げます。

筑波大学名誉教授三輪辰郎先生には、研究の厳しさを教えていただきました。「コミュニケーションという新たな領域に挑むならば、その道の第一人者になるつもりでやらなければならない」という先生のお言葉は、数学教育の研究がどのようなものなのか見当もつかなかった院生1年目の私にとって、大変厳しいものでしたが、その言葉によって、なんと

か今日まで、このテーマを放棄することもなく、研究を進めてくることができました。先生のお言葉により、問題の整理から研究方法論の開発まで、すべてを自分自身で行わなければならないという覚悟ができました。先生のご指導に心より感謝の意を申し上げます。また、本研究では、三輪先生の「数学の問題解決の授業についての日米比較研究(1990)」から、多くの事例を引用させていただきました。重ねて、感謝の意を申し上げます。

筑波大学助教授清水静海先生には、本論文の構成に関して、大変貴重なご指導をいただきました。自分の研究成果に自信がもてず、何を書いたらよいのか迷っていた院生時代に、「もっと自己主張をするべきだ」という先生のお言葉によって、私の研究に1つの転換点をもたらされました。教育現場に役立つ研究、そして、学習者の視点を常に大切にする研究の追究という清水先生の姿勢を学ばせていただき、私も研究のための研究に終わらない研究をしていきたいと思えます。先生のご指導に心より感謝の意を申し上げます。

埼玉大学教授町田彰一郎先生には、埼玉県立浦和第一女子高等学校定時制課程に勤務していた時に、数学教育学研究とは何かということを教えていただきました。数学教育学という学問について何も知らない私に、研究の初歩を丁寧にご教授していただいた先生との出会いがなければ、この論文も、また研究者としての私も存在し得なかったと思えます。町田先生のその後も変わらぬ温かいご指導に対し、心より感謝の意を申し上げます。

東京学芸大学教授伊藤説朗先生には、院生時代より大変お世話になりました。数学教育学論究への投稿や、科学教育研究への投稿という私の研究の節目に、いつも先生の温かなご指導とご支援がありました。新算数教育研究会へのお誘いなど、それまで中学校以降の数学教育へ偏りがちな私の視点を初等教育へも開かせてくださいました。今日、各地でコミュニケーション研究が盛んになってきました背景には、このテーマに対する伊藤先生の深いご理解があったからだと思えます。先生のご指導に心より感謝の意を申し上げます。

筑波大学名誉教授芳賀純先生には、ピアジェ研究会の席上で、ピアジェの認識論の深さを優しい語り口で丁寧にご教授していただきました。ピアジェ研究の第一人者である芳賀先生から、直接ピアジェの著作に込められた思いをひも解いていただきましたことは、ピアジェの認識論とその継承者スケンプの研究に多くを依存してきた本研究の考察に、大変貴重な示唆を得る機会となりました。ピアジェの著作「意味の論理」の翻訳という仕事でお世話になりました、川村学園女子大学教授原田耕平先生と文教大学助教授岡野雅雄先生への謝辞とともに、豊かな認識論研究の世界を私の前に示していただきました芳賀先生のご厚意とご指導に、心より感謝の意を申し上げます。

筑波大学教授、谷川彰英先生、宮寺晃夫先生、ならびに、塚田泰彦先生には、論文指導委員会の委員として、約3年間の長き年月にわたり、心細やかなご指導を賜りました。まだまだご指導の意を尽くせない点がありますが、考察と論述の点で多くの問題点を有していた初稿が、なんとか結束性のある議論として展開できるようになりましたことは、3人の先生方のご指導の賜物です。先生方のご指導によって、この論文を完成することができましたことを心より感謝申し上げます。

筑波大学助教授茂呂雄二先生には、言語心理学の専門家の立場から本論文の審査をご担当していただくことになりました。「ことばについて問うことは、人間であることを広く深く問い直すことである」という考え方に共感し、ことばと思考について考えてきました私にとって、先生の審査を受けることができましたことは、今後の研究に大変貴重な示唆を得る機会になりました。先生のご指導に心より感謝申し上げます。

本論文は、関東学院大学工学部基礎科目教室に在職していた時に行った研究に、その多くを依存しています。関東学院大学は、「人になれ、奉仕せよ」という優れた教育理念をもつ素晴らしい大学でした。高い教育理念に基づく学風は、大学人となったばかりの私を快く迎え入れ、教職員のみなさんは、私が研究に集中できる環境を整えてくださいました。関東学院大学教職員の皆様のご厚意とご支援がなければ、私の研究がここまで来ることはなかったことと思います。特に、関東学院大学教授、飯尾力先生、ならびに、堀田和久先生には、数学者のコミュニケーションについて多くの示唆をご提供していただきました。同校におけるかけがいのない思い出とともに、関東学院大学工学部と教職課程の教職員の皆様に、心より感謝の意を申し上げます。

宇都宮大学教授木村寛先生には、この論文執筆の直接のきっかけとなる宇都宮大学での集中講義の場をご準備していただきました。集中講義でこれまでの研究をまとめて話す機会を得ることができましたことで、漠然と考えていた学位論文の執筆が現実化しました。その後、木村先生のご尽力により、宇都宮大学教育学部という教育学の研究者として最良の環境を準備していただきました。栃木県の先生方とともに、この理論研究をいかに実践に活かすのかということを経後の課題として考えていきたいと思っています。いつも穏やかな面もちで見守ってくださる先生のご厚意とご支援に対し、心より感謝の意を申し上げます。

筑波大学の先輩方、ならびに、同窓のみなさんには、一番厳しい時代に、精神面と研究面の両方から多くのご支援をいただきました。特に、故奥招先生（三重大大学教授）には、研究の進まない状態のとき、幾度となく助けていただきました。「君は楽しそうに話すね」

とゼミの後に声をかけていただいたことは、研究は楽しくなければいけないという先生の言葉として、本研究を成し遂げる基盤となってきました。奥先生への感謝と哀悼の言葉とともに、奥先生のご好意に報いるためにも、今後も頑張っていきたいと思います。また、ここでは一人ひとりのお名前を記名して謝辞を述べることはできませんでしたが、筑波大学の先輩方、ならびに、学友の皆様のご厚情に心より感謝の意を申し上げます。

このように書き上げますと、これまでの研究生活の中で、実に多くの方々のご支援があったことを実感いたします。残念ながら紙面の都合で、すべての方々のお名前を記して謝辞を述べることはできませんでした。ここにお名前を明記し謝辞を述べることはできませんでした先生方へのお詫びの言葉とともに、これまで多くの面で支えていただきました先生方へ改めて感謝の意を申し上げます。また、授業観察や事例の収集にご協力していただいた学校の先生方と児童・生徒のみなさんにも感謝の意を申し上げたいと思います。

そして、埼玉県立浦和高等学校での出会い以来、常に傍らで私を支えてくれた海野智君に感謝したいと思います。君の支援がなければ、私は、私の力を信じてここまで頑張ってきたことはできなかったと思います。論文の完成を心より喜んでくれる友がいることを、私は幸せに思います。新しいアイデアを生み出すとき、常に、そのアイデアを創発させる他者とのコミュニケーションがありました。優れた人物との出会いと交流なくしては、私は、私自身の思考の限界を超越することはできなかったと思います。

最後に、私の人生そのものを支えてくれた父^{ふみお}富三雄（故人）と母和子に、そして、論文執筆を傍らで見守り続けてくれた妻純子に感謝の意をささげたいと思います。多くの人々に支えられてこの論文が完成したことを家族とともに感謝し、人と人とを幸せにしたり、不幸にしたりするコミュニケーションの世界に対する新たな研究の始まりを、今後は家族の幸せも省みながら考えていきたいと思います。

2003年（平成15年）6月25日

宇都宮にて 著者記す